「風の音が聞こえる」

川村　ひとみ
（18－1　養護　パラグアイ共和国　横浜市立東小学校）

おはようございます。南米パラグアイで、養護隊員として活動し、昨年の３月に帰国しました。今回、お話させて頂く時間をいただきまして、1 年前の活動を振り返ってみました。これから行かれる先生方の参考になればと思います。

それでは早速始めたいと思います。声、聞こえますでしょうか。大丈夫でしょうか。まず、題名ですが、なぜこんな詩的な題名を付けたのかといいますと、それはパラグアイで出会ったある難聴のお子さん、聴覚障害のあるお子さんの言葉、印象に残った言葉からこの題名に使わせていただきました。こちらの写真のほうはちょっと違うのですけれども、特別支援学級の担任をしておりましたので、そのときの写真で、私の一番気に入っている写真を使っています。今日はせっかくですので、パラグアイのことについても少々紹介させていただきたいと思います。それに続いて、私の活動の中心でした難聴のお子さんとの交流についてお話させていただきます。

まず、パラグアイですが、皆様はご存知だとは思うのですけれど、帰国してからも行く前も、パラグアイと聞いて「そこってどこにあるの？」いう質問がありました。サッカーのお好きな方でしたら、「あっ、南米の国かな。」というふうにはご存知なのですが、では一体どんな国だろうかというと「うーん、知らない。」という人が多かったと思います。意外に、日本との繋がりは長く、入植 73 年を迎えます。第二次世界大戦後、日本は、ラ・コルメナという一番最初の入植地の日系人から支援物資を受けています。サッカーが強いのはとても有名です。ここに南米一・世界一の親日国とありますけれども、本当に、日本人に対する信頼が厚くて、そのお陰で、私もだいぶ活動しやすかったと思います。本当にパラグアイ人の人柄に助けられました。

年間を通してとても暑い国なのですけれども、一応四季はありまして、ちょうど日本の夏にあたる頃は気温 5℃という日もあります。今日の、今の日本よりも寒い日もあります。

パラグアイ人は日本にとても関心があるので、色々なことを知っています。広島・長崎の原爆のことも知っていましたし、日本の電化製品がとても良いとか、日本車に対する憧れですとか、ワールドカップを日韓共同開催したこととか、また、ちょっと誤解ですけれど、みんな空手ができるのと言っていたり、ジャッキー・チェーンは日本人だと思っていたりしました。日本で働きたいというパラグアイ人も多く、第二外国語に日本語を取り入れようという文科省の決定も、私がパラグアイにいる間になされたと思います。

（パラグアイの人々は日本に対して）治安が良い国というイメージがこれまでありましたが、無差別殺人ですとか、食品の問題ですとか、そういうニュースがどんどんパラグア

イに入ってくるので、ちょっと今の日本は危険かなということを、パラグアイの人から言われることも最近は残念ながらあります。

このように、パラグアイ人が日本のことを知っているほどに、日本人はパラグアイを知らないのではないかと思っているので、今後は、パラグアイの紹介をしていきたいなと思っております。

パラグアイは南米の真ん中にあって、小さいように見えますが、日本とほぼ同じくらいの面積があります。私がいたのが北部のコンセプシオンという県で、ちょうど南回帰線上に位置しているので、日本の冬至のときに太陽が真上になって影がなくなるそうです。

こんなふう（写真）に、動物たちと共存しておりますので、毎日のように牛、馬、色々な動物たちとすれ違っていました。こんな（写真）綺麗な夕日も見るこができました。

さて、本題に入りますが、私が活動していたところは、フォルトゥナタ・グレスネル学校といってミッション系の学校です。私立なのですが、決して経済的には裕福でないお子さんが来ていました。約 330 名のお子さんがいらしたのですけれども、下は幼稚部というか大体 3 歳児くらいから、障害をお持ちの 3 歳児くらいから、上は日本の中学 3 年にあたる 9 年生までいましたが、そのうちの約 3 分の 1 は、軽度発達障害を含めて、何らかの障害を持っているお子さんたちでした。授業が二部制だったので、午前・午後合わせて４０名の教員、そのうち 5 人はシスター、というか修道女ですね、も含まれていました。私はその午前･午後両方活動しておりまして、午前中は主に特別支援学級の担任として、午後は聴覚障害のお子さんの個別指導をしておりました。うちの学校の、フォルトゥナタ・グレスネルの特色としては、難聴学級というのがあったというのが大きな特色だったと思います。特に聴覚障害のお子さんは全校の約一割いました。積極的に、難聴児を受け入れておりました。統合教育というのを目指して設立された学校なのですが、いろいろな問題がありました。ボランティア派遣にあたっては、要請内容というのがあるのですけれども、特に現職教員には、「現地の先生方に対する指導」というのが含まれていたと思います。そして子どもたちへの指導。パラグアイは、私が派遣されたときはちょうど障害児教育の歴史が 50 周年だったのですが、実際には大学に養成する課程がない、知識がないままにクラスを持たせられる、という言い方は良くないのですけれども、そういう先生方もいらっしゃいました。また、日本のように年齢や経験年数によって賃金が上がっていくわけでもないので、やる気のある先生でも、労働意欲がなかなか持続しにくくなって・・・。実際教材を作ろうとしても教材費がないので、先生の少ない給料から出さざるを得ないような状況でした。

そこで、主に次の３つの目標を立てました。「特別支援教育の質的向上を図る」という、とても偉そうな内容ですが、一応これは要請内容を踏まえて決めましたが、出来る範囲でそれを目指していきたいと思いました。

また二つ目、これは私の活動の中心になるのですけれども、私は、元々横浜市の通級指導教室で難聴のあるお子さんに対する指導を主にやっていたので、自分の慣れているとこ

ろというか、自分のこれまでやってきた活動を生かせるということで、これを目標の一つにいたしました。

また最後は、パラグアイという国の文化交流を間接的にでもできればと思い、３つめの目標としました。

まず、一つ目なのですが、午前中は特別支援学級の担任として、パラグアイの先生と組んで担任として指導をしました。というのは、一応語学訓練を受けてはいますが、とても拙いスペイン語で、いくら経験があるとはいえ、それなりにプライドのある現地の先生方に対して、指導する立場となるのは非常に難しいと思います。また、要請があるからといって、先生方がそれを望んでいるかというとそれもまた別です。校長先生は勿論それを希望されて要請してくださっているのですけれども、じゃあその現地の先生方も積極的にボランティアを受け入れるかというと必ずしもそうではないので、一緒にやりながら教材を作ったり、子どもたちに伝えながら、いいと思ったところを取り入れていただいたり、ということを通して、最初の目標の達成としました。で、これ（写真）はダンボールで作ったのですが、なるべくお金をかけず廃材を使ってできるものを考えて、子どもたちの指導に使っていきました。

次に、二つ目の目標、聴覚に障害のある子どもに対して聴覚保障、つまり聞こえの保障を図ると共に、聴覚活用を進めたい、というものがありました。

というのは、フォルトゥナタでは、聴覚に障害のあるお子さんを積極的に受け入れていました。ですから遠方からも来てくれました。寮がありまして、そこで寝泊りできるようになっていました。また、シスターたちはイタリアで聾教育を学んでいるので、それなりの知識はありました。でも実際は、補聴器がないにもかかわらず聴覚口話法、つまり音声言語を身につけさせて、口を読み取って普通に対話ができるような指導を目指していたのです。日本での昔の聾教育もそうだったのですけれど、少なくとも日本は補聴器をした上での聴覚口話法でした。ところが補聴器がないのに、音声言語で話せ、手話はだめだ、という悲しい現実がありました。

そして、聴力にはレベルがあって、少し聞こえるお子さんから殆ど聞こえないお子さんまでいるはずなのに、「喋れないのはあんたの頭が悪いからよ。」とか、「なまけものだからよ。」と、シスターたちが言っているのを聞いて本当に切なくなりました。

そこで、私が何かできることはないかと考えました。

で、まず、聴覚の障害のあるお子さんたちの気持ち、こんな思いでいるのだよ、ということを知ってもらいたいと思いました。また、午後は聴覚に障害のあるお子さんの個別指導を行っていたので、その場面だけでも少しでも聞こえるようにしたい、音を入れてあげたいと思いました。

そして、（フォルトゥナタには）音楽という授業はなかったのですけれども、音を楽しむ気持ちを、音に気づく気持ちを育てたいなと思いました。

そこで、まず始めに、まだ（パラグアイに）着いて間もなかったので言葉は拙かったの

ですが、パラグアイ人の協力を得て、研修会を開きました。先生方を対象に、聴覚障害にはこんな色々なタイプがいるんだよとか、聞こえないことでこんなことが困るんだよという話をしました。で、次いで三月には、お母さん方を対象に研修会を開きました。（写真）ここにいらっしゃるのは、耳鼻科の先生です。先生と一緒にお話をさせていただきました。

「聴覚活用までの道のり」ですが、何とか、せめて言葉の指導をしているときだけでも、音を増幅して聞かせたいということで校長に相談したところ、「姉妹校には訓練器があるけどうちでは高くて買えない。」ということで、姉妹校というのはパラグアイに四校同じような学校があったのですけれども、その中の一校に訓練器があり、それを見に行ってきました。ですが、実際には使われていない状態でした。

次に、これは今回お世話になった筑波大学の先生方ですが、現職教員をサポートしてくださるので、そこを通して何かいい方法はないかということで、相談させていただくことができました。本当にお忙しい中、何度も何度もメールを通してアドバイスしてくださいました。

また、シニアの電気隊員に相談して、音声増幅器は作れないか、コストを下げて作れないか、そういったことを相談しました。で、最終的には補聴器ということになるのですけれども、実は最初の段階では、補聴器については全く考えていませんでした。というのは、補聴器は、使うにあたってはフィッティングという作業が必要です。色々高額な機械が必要なので、パラグアイでそれを実践するにのまず無理だろうと思って、補聴器のことは、最初は考えていませんでした。

庄司先生が早速調べてくださいまして、全国の聾学校に呼びかけて、聴能訓練器というものが使われないで眠っているということが分かりました。それを送ることができるかもしれない、ということだったのですけれども、一つ一つがとても重く、また送料をどこからも調達することができなかったのです。パラグアイの方でも、外務省の「草の根無償資金」ですとか、JICA の活動費ですとか、問い合わせたのですが、送料を出すのは不可能だと言われ、これは諦めざるを得ませんでした。庄司先生は実は、ポケットマネーを出してでも送ろうかとも言ってくださったのですが、さすがにそこまでお願いすることはできませんでした。また、これはメールでのやりとりだったのですが、過去の隊員から、やはり同じように補聴器を送ってもらったけれど、結局は使わなかったと、使えなかったと、だから補聴器は諦めて、聴覚に頼らないコミュニケーション法を指導した方がいいという意見もありました。また、聾教育を専門とされてきた先生には、補聴器があってこその聴覚活用であるのに、補聴器がないのにやろうなってそんなの無理、という厳しいご意見も頂戴しました。そこで、シニアボランティアに頼んで、とにかく簡易なものでも作ろうと思って、出来上がったのがこれ（写真）です。これは全部パラグアイにある材料でできています。で、この子（写真）がこれを使って、発音の練習をしているところ（写真）です。初めて使った時は、音が増幅されたので子どもたちはとても喜びました。ところが、暫くしてから嫌がるようになってしまったんですね、使うのが。というのは、あ、これすいま

せん、資料の方は漢字間違えております。すいません。こちらの方ですね。確かにパラグアイにある材料で作れます。で、低価格でできるのですが、問題点としては、ラジオの音まで、周波数の関係でしょうか、拾ってしまう。騒音も一緒に増幅されてしまうので、子どもたちにとってはただうるさいだけで、もうそれだったら使わない方がいいということで、静かな場所で、軽度なお子さんに対しては効果があるのだけれども、常時使っていくのは難しいなって正直思いました。そんな時に、日本の、これまで一緒に、あの、派遣前に一緒に仕事をしていた先生から、多分庄司先生を通してだと思うのですが、私がそういうことで悩んでいるっていうことをお知りになって、その先生からメールを頂戴しました。通級教室で現在使用していない箱型補聴器を使ったらどうかと。箱型補聴器は、調整しやすいし、イヤホールドという耳型を作らなくてもなんとかできるし、普通、補聴器っていうのはボタン電池ですけれども、単三や単四の電池でも使えると。ということは充電池で対応出来るので、子ども達が電池を買わなくてもいいということで、これだったらいけるかもしれないと思いました。ただ先程申し上げたように、送料というものの出所がないので、横浜市の、難聴・言語通級指導教室の先生方の寄付によって、送ってもらいました。そして、フィッティングエイドの簡易なものも送ってもらいました。ここにお名前を書かせていただいたのですが、実は偶然にも、私は帰国してからこの学校に転任になったので、なにか不思議な縁を感じています。

これが二つ目の目標なのですが、3 月に補聴器が届きました。ただ子どもたち全員分はなかったので、装用をする子どもについては、校長先生と相談して決めていきました。これ（写真）が箱型補聴器です。これ（写真）が簡易のフィッティングエイドですね。で、補聴器をフィッティングするのにはとても時間がかかりまして、子ども達の聴力をみて合わせて、教室で実際使っていって・・・という、積み重ねが必要なんです。これ（写真）は難聴学級で使っている様子です。まず最初は一時間、次の日には二時間、というふうに、時間をかけて使ってきました。これ（写真）は、パラグアイ人にはこういう発想はなかったのですが、一応（補聴器を）使うにあたっては、保護者に承諾書というのを書いて頂きました。これ（表）は補聴効果をみるテストですが、子どもたちがよく知っている 20 単語を、補聴器がある状態・無い状態で、それぞれ口を見せたときと見せないときとで、どのくらい聞き取りに差があるか、ということを調べました。口を見せた場合は、補聴器があるときと無いときとでは、20%の違いなのですが、口を隠してしまうと、補聴器がないと 10%の聞き取り率でした。ところが補聴器があると 70%の聞き取り率でした。下（表の下の数値）は母音が正しく聞き取れた割合です。これ（動画）がその様子です。ご覧ください。どちらも口元は隠しています。まずは補聴器がない状態です。はい。補聴器があるとちゃんと聞き取れて、何といっているのか、どういう言葉かがわかるということで、このお子さんは私が補聴器を渡したときに、補聴器にチュッとキスをしていました。

後期、活動には前期後期と分けて考えていたのですけれど、後期も引き続き補聴器装用指導をしていきたいと考えました。幸いなことに、神奈川県の先生方の、パラグアイ視察

の旅というのがありまして、それに同行したＪＩＣＡ横浜のスタッフを通し、さらに第二弾として補聴器を受け取ることができました。難聴一人ひとり、個別指導を通して補聴器装用の練習したのですが、そのとき（初めて補聴器をつけた時）に、気付いた音を言ってと言ったときに、あるお子さんが、「風の音が聞こえる。」、「水の音が聞こえる。」、「カサカサする、枯れ葉の音が、それを踏んだときの音が聞こえる。」と言ったこと、それがとても印象に残っていて今回の題名にさせて頂きました。

補聴器を送ってくれた通級指導教室へ、クリスマスに向けて礼状を作成しました。このお子さん（写真、少女）は補聴器をとても喜んで使っていたお子さんだったのですが、ある日、突然いなくなってしまったんです。どうしてかな、補聴器も置いていったんですね。そうしたらどうも家の事情で、お母さんの具合が悪くなって、家に帰らなければならないということで帰ってしまったんです。そこで担任の先生にお願いして、どうしても彼女に会いたい、補聴器を渡したいということで（彼女の家に）連れていってもらいました。彼女はこれ（ポリタンク）を二つですね、ポリタンクですか、なんという名称かわからないのですけれど、これを二つ持って水汲みしていました。洗濯もして、兄弟の世話もしていました。本当に貧しい子なのに、貧しい家の子なのですけれど、すてきな笑顔でした。

そのほかの活動としては、パラグアイと日本との文化交流を図りたいといった大それた目標をたてていたのですが、パラグアイの人たちは、広島・長崎、原爆を知っていて関心があったので、「平和への祈り」展（原爆展）を開催しました。この２人の子ども（写真）も聴覚障害児で、音声言語はほとんどなく、あまり話せなかったのですが、とても器用でしたので、来場者に対して鶴の折り方を指導するという活動をしてもらいました。コンセプシオン市内の学校に声をかけて、五日間で1500人以上の児童・生徒に来てもらいました。もちろん私一人ではできなかったので、同僚の先生方、そして生徒たちに手伝ってもらいました。また、子どもたちが作った作品ですとか、教材を展示する機会があったんですよ。そのとき、特に店番のようなものは頼んでなかったのですが、子どもたち、特別支援学級の子どもたち、難聴の子どもたちがすすんで来て、手伝ってくれました。これ（写真）、先程のお子さん、さっき水汲みをしていたお子さんなんです。普段はこういう綺麗な制服を着ています。

そしてそれ以外に、同じ養護の隊員で、粘土を、美術教育を専門にしていた隊員を呼びまして、障害がある子どもたちに指導してもらいました。で、それを（行事の時、保護者や先生方に）子どもたちが売りました。

そして、難聴のお子さんには打楽器というのがとても効果的ですので、それを通して音楽の楽しさを伝えたいと思いました。というのは、打楽器というのは、低い周波数の音なので、比較的音の存在を感じやすいということで、効果的です。ところが、届いたのが予定していた10月ではなく１月になってしまって、子どもに直接指導する時間がなくなったので、先生方に知ってもらうということで説明会（楽器の演奏法）を開きました。

どうもすみません、駆け足になってしまったのですが、最後にこれだけ。

活動を振り返ってみて、ほとんど言葉がわからないという状態で、ちょっとだけ難聴児の気持ちが理解できたように思います。子どもたちは聞こえなくても、音楽を楽しんだり、ダンスを楽しんだりしています。

帰国後は広島を訪れて、「平和への祈り」展の来場者の皆さんに作っていただいた千羽鶴を納めてきました。

すみませんでした。なんか駆け足で。ご静聴ありがとうございました。